名所物見の旅　其の六拾七　中国雑技団に感激した北京の夜

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

中国の古い史跡を訪ねて北京に滞在中、ガイドが夜の娯楽として京劇か雑技団の公演に行かないかと勧めてきた。京劇は「三国志演義」や「西遊記」「水滸伝」などが有名で、公演は長い物語の中から誰もが知る一節が演じられるという。「三国志演義」ならば呂布が妖婦・貂蝉（ちょうせん）に籠絡されて董卓を殺害する場面や、諸葛亮と司馬懿（仲達）の五丈原での戦い、馬超と張飛の昼夜に及ぶ一騎打ちなど、十を数える演目があるという。また史記で知られる項羽と劉邦の鴻門宴や、項羽と虞妃（虞美人）の最後の別れなど泣き所を心得た演目もある。京劇は日本で言えば、歌舞伎の義経・弁慶演じる「勧進帳」などを連想させるが、より一層派手なオーバーアクションが売りで、瞬間的に仮面が変わるなどのマジック的要素もある。数ある京劇の演目の中には「隋唐演義」などという、日本人にはあまり知られていない興味引かれるものもあるが、京劇目当てに訪中するのでなければ、一般旅行者がこうした演目を観劇することはまず不可能だということだった。

結局、このあと訪れる西安で古典劇の観劇予定が組まれているので、雑技団を見ておいたほうがよいというガイドの勧めもあって、雑技団の公演の方を申し込むことにした。中国雑技団という名前は何度か聞いたことはあったが、興味も関心もなかったわたしは、この夜はじめて、その図抜けたパフォーマンスに接することになったのである。

劇場に到着して観客席に向かうと、ガイドの雷さんが手配してくれた席は前方中央の特等席であった。こうしたよい席はほとんど中国人や日本人で占められ、通路を挟んで両サイドの席に欧米人が多いのも、なにやら世界の経済情勢を反映しているかのようであった。もっとも日本人が特等席にいられるのは、景気の裏付けがない円高が理由であり、いずれ末席に移動する日も近いかもしれない。そんなことを考えながら席に着くと、足元にポップコーンが散乱している。昼の公演終了から夜の開演まで時間があったはずだが、このあたりが客に対する気配りに欠ける中国らしい点であろうか。

西安で上演される古典劇は中国戯曲の原型ともいえるもので、清の時代に北京で発展した京劇と比べると派手さはなく、ゆったりとした歌や踊りが特徴であった。西安はわれわれが歴史で習った古都「長安」のことで、一世紀に漢から金印を下賜された委奴国王や三世紀に魏に朝貢した卑弥呼の使者たちをはじめ、遣隋使や遣唐使らもこの地を目指し訪れたのである。

さて雑技団の演技が始まると、まず少女たちの柔軟な身体を生かしたアクロバチックな妙技に驚かされた。続いて重そうな大きな甕を次々と放り投げて高いところにいる男の頭上に乗せたり、女性たちが紐を使って自由自在に独楽（こま）を操る演技、定番の皿回し、少女たちによる自転車の曲芸、車輪のような輪の中の人が入ってぐるぐる廻ってみせたりと、観客を楽しませるパフォーマンスが次々と演じられた。

なかでも面白かったのが、十数人の若者たちがそれぞれモダンなデザインの麦藁帽子を隣りの人に渡したり大きく投げたりする演技で、あまりの速さに空中にストローハットが静止しているように見えてしまう。われわれは皆レベルの高い演技に充分満足して、雑技団を見に来て正解だったと思ったのであった。

しかしこの雑技団公演の最大の山場は、やはり最後に用意されていたのである。ファイナルショーに登場したオートバイのパフォーマンスは、これまでの観客を楽しませるといったものとは次元を異にする、まさに度肝を抜かれるものであった。舞台の中央に高さ10メートルくらいの鉄製の丸い籠が置かれ、そこへ一台のオートバイが登場する。そして進行役の女性が籠の下方にあるドアを開けると、オートバイは籠の中に入って走り始めた。籠の内側を縦横無尽に走り廻っているのであるが、一定のスピードを出さなければもちろん落下してしまう。そこへもう一台のオートバイが登場して、果敢に中に入って同じように走り始めた。ちょっとでもスピードやコースを間違えれば衝突してしまうので、ハラハラドキドキ。そこへまた一台、三台目のオートバイが中に入った。もう観客は手に汗握るといった状態で固唾を呑んで見守っているところに、四台目のオートバイが登場する。籠の中のスペースを考えれば、四台のオートバイが走り廻るなど、信じがたいことであった。

中国では本場の中国料理を食べることも、大きな楽しみのひとつ。北京の代表的料理である北京ダックに、テーブルを囲んだわれわれ日本人は舌鼓を打って、大いに堪能した。

しかしそれで終わりではなかった。五台目に女性ライダーが登場して、籠の中に果敢に飛び込んでいったのである。ありえない次元の曲芸に、周りには悲鳴のような叫び声を挙げている女性客もいる。まさに息詰まる光景だが、ウィーンウィーンとエンジン音を唸らせて五台のオートバイが走り廻る様子は、まるで籠の中を賑やかな虫たちが飛び廻っているようにも見えた。やがて一台ずつオートバイはドアから外に出てくるのだが、最後の最後まで、一瞬のミスも許されない状況が続く。このオートバイのパフォーマンスに観客は一様に圧倒され、皆拍手喝采を送って演技を讃えた。わたしもこんなに凄いショーを堪能できるとは思っても見なかったので、大いに感動させられた。

中国を訪れる機会があったら、中国雑技団の公演を見ることを是非お奨めしたい。北京や上海では観光客用に毎晩公演があるようなので、ツアーならばガイドに頼めば手軽に見に行くことができる。中国は夏王朝以来四千年を越える文明を誇っているが、わたしは雑技団の演技を通じてその底力を見せつけられた思いであった。

中国の夜のアミューズメントは、雑技団によるショーを楽しむのがお奨めのコース。数々のパフォーマンスのフィナーレは、円形の鉄籠の中を五台のオートバイが走り廻るという信じられないような曲芸で、観客は只々圧倒されて固唾を呑んで見守るばかりであった。

イラスト：maruco